平成２６年千葉市教育委員会会議
第１１回定例会会議録

千葉市教育委員会

平成２６年千葉市教育委員会会議第１１回定例会会議録

日時　平成２６年１１月１９日（水）
午後２時００分開会
午後３時４５分閉会
場所　教育委員会室

出席委員	委員長	和田　麻理
	委員	中野　義澄
	委員	内山　英夫
	委員	明石　要一
	委員	小西　朱見
	教育長	志村　修

出席職員	教育次長	田辺　裕雄	保健体育課長	津野　政彦
	教育総務部長	米満　実	教育センター所長	遠藤　悟
	学校教育部長	磯野　和美	養護教育センター所長	山本　雅司
	生涯学習部長	朝生　智明	生涯学習振興課長	増岡　忠
	総務課長	石野　隆史	中央図書館長	松尾　修一
	企画課長	大崎　賢一	生涯学習振興課科学教育推進担当課長	西村　安正
	学校施設課長	真田　賢一	総務課総括主幹	小名木啓一
	学校施設課学校耐震担当課長	髙橋　広文	学事課長補佐	布施　善幸
	学事課長	小川　彰	指導課指導主事	川名　正雄
	教職員課長	伊藤　剛	生涯学習振興課主事	永野　泰弘
	指導課長	山本　幸人		

書記	総務課長補佐	山本　春樹	総務課主任主事	杉山　隆
	総務課総務係長	渡邊　実	総務課主任主事	佐久間暁子
	総務課経理係長	岡　武史	総務課主事	荒井　博行

１　開会
和田委員長より開会を宣言

２　会議の成立
全委員の出席により会議成立

３　会議録署名人の指名
和田委員長より内山委員を指名

４　会期の決定
平成２６年１１月１９日（１日間）ということで全委員異議なく決定

５　議事日程の決定
議事日程を全委員異議なく決定

６　会議録の承認
平成２６年第６回定例会会議録及び第７回定例会会議録を全委員異議なく承認

７　議事の概要
(1) 非公開事項の決定
議案第３８号から議案第４０号までを非公開審議とする旨決定
(2) 報告事項
報告事項(1) 平成２７年度公立学校教員採用候補者選考（二次）受験状況について
伊藤教職員課長より報告があった。
報告事項(2) 平成２６年度千葉市中学校音楽発表会について
山本指導課長より報告があった。
報告事項(3) 平成２６年度千葉市中学校生徒会交流会について
山本指導課長より報告があった。
報告事項(4) 平成２６年度前期ライトポート・グループ活動諸行事について
遠藤教育センター所長より報告があった。
報告事項(5) 関東地区教育研究所連盟第８６回研究発表大会について
遠藤教育センター所長より報告があった。
報告事項(6) 長柄ハッピーキャンプについて
山本養護教育センター所長より報告があった。
報告事項(7) 千葉市科学フェスタ２０１４メインイベント及びサイエンスクラブアセンブリーの開催について
西村生涯学習振興課科学教育推進担当課長より報告があった。
報告事項(8) まなびフェスタ２０１４の開催について

増岡生涯学習振興課長より報告があった。

(3) 議決事項

議案第３７号　平成２６年度末及び平成２７年度公立学校職員人事異動方針について

伊藤教職員課長より説明があった後、審議。全委員異議なく、原案どおり可決した。

議案第３８号　平成２６年度補正予算について

学校施設課長より説明があった後、審議。全委員異議なく、原案どおり可決した。

議案第３９号　千葉市立小学校設置条例の一部改正について

議案第４０号　千葉市立中学校設置条例の一部改正について

学事課長より一括説明があった後、審議。議案ごとに個別で議決を行った結果、全委員異議なく、原案どおり可決した。

(4) 発言の要旨

報告事項(1) 平成２７年度公立学校教員採用候補者選考（二次）受験状況について

和田委員長　教職員課長、報告をお願いします。

伊藤教職員課長　報告事項(1)「平成２７年度公立学校教員採用候補者選考（二次）受験状況について」、報告します。

７月に第１次選考、８月中の６日間で第２次選考を実施しました。結果の通知については本人宛てに１０月１０日に一斉配送されています。また、県教育委員会のホームページにおいても合格者の受験番号を掲載しました。

第２次選考の合格状況についてですが、全体で１，８３２人が合格し、倍率は４．１２倍でした。これは昨年度の４．２７倍よりも０．１５ポイント低くなっています。個々の学校種や教科ごとの合格者数や倍率等については、お手元にある資料をご覧ください。

最後になりますが、本市では来年度、小学校で１３６人、中学校で７６人、特別支援学校８人、養護教諭５人の、合わせて２２５人の採用を予定しています。今後合格者の希望調査等をとり、その中で一人でも多くの優秀な人材を千葉市として確保できるように努力していきたいと考えています。

和田委員長　今年度、受験倍率が昨年と比べて同じくらいと言っていいかと思うのですけれども、少し減っているということでした。過去１０年くらいにおいて、倍率の推移というのはどうなっているの

でしょうか。もちろん募集が少なくて採用が少なかった時期とは少し話が違うと思うのですが、採用が少なかった時期を越えてからの倍率はどのように変化しているのかということと、それから規模が同じくらいの自治体の政令市と比べるとこの倍率がどうなのかをお伺いしたいと思います。

伊藤教職員課長　この１０年間ですが、平成２１年度までは受験者数の総数が約５，５００人前後で推移しています。合格者数も１，４００人前後。最近の５年間の受験者総数が平均すると約７，５００人で、合格者数が約１，８００人ということで、全体的な倍率については４．２倍から４．５倍あたりをずっと推移しています。

直近の５年間の倍率においては平成２３年度が４．４７倍、２４年度が４．１３倍、２５年度が４．１７倍、２６年度４．２７倍で、２７年度４．１２倍となっています。

なお、他の政令市の状況についてですが、東京、埼玉、神奈川とは１都３県でこの採用選考についての協議会等実施していますが、やはり同じような受験者の傾向があります。したがって各市・県とも優秀な人材の確保にはかなり対策を色々と講じている状況ではあります。

和田委員長　わかりました。応募者が減ってきていることだと少し心配だと思ったのですが、応募者自体が増えていると考えてよろしいのですね。

報告事項(2) 平成２６年度千葉市中学校音楽発表会について

和田委員長　指導課長、報告をお願いします。

山本指導課長　報告事項(2)「平成２６年度千葉市中学校音楽発表会について」、報告します。

資料中に記載の目的や日程にありますように、１０月３０日（木）、３１日（金）に平成２６年度千葉市中学校音楽発表会が行われました。今年で４６回目を数える歴史ある行事です。

本発表会は情操教育の一環として市内の全中学校及び特別支援学校参加による音楽会です。日常の音楽学習の成果を発表し、相互に鑑賞し合うことによって音楽学習への意欲と関心を高め、千葉市の中学校音楽教育の振興と向上を図るために実施されています。

全参加校が４つのグループに分かれ、千葉市民会館で行われました。参加校の内訳は、千葉市立中学校が５６校、特別支援学校１校の５７校です。

出演プログラムをご覧ください。１日目の午前中に１３校、午後に１５校。２日目は午前中に１４校、午後に１５校がそれぞれ発表をしました。それぞれのグループで共通のプログラムを実施しています。全員合唱の場面では、前半に「千葉市歌」、「夢の世界を」、後半には千葉市のイメージソング「心の飛行船」と「大地讃頌」を歌っています。「千葉市歌」は大変著名な作曲家、弘田龍太郎氏の作品であり、現在は中学校を中心に指導している曲です。千葉市民としての誇りを大切に今後も引き続き指導していくようにしたい曲です。「夢の世界を」は教科書にも載っている曲で、８分の６拍子の比較的簡単な合唱曲です。発声練習を兼ねて歌っています。後半の「心の飛行船」は千葉市のイメージソングです。「大地讃頌」は中学校の卒業式の定番となっている曲で、平和の尊さを歌っています。最近では成人式の式典でも合唱するようになっています。

次に、演奏内容についてです。各校の合唱コンクールで優秀賞に選ばれた学年や学級が参加することが多いため、ほとんどの学校で３年生が参加しています。学校事情によって学年や部活動、有志、全校による参加も見られます。

演奏曲は部活動による女声合唱以外は混声合唱となっています。安定した男性の声の響きが合唱全体を支え、さすが中学生と感心させるような混声合唱が多く発表されました。

多く演奏された曲目ベスト５です。１位は全員合唱でも取り上げられている「大地讃頌」、次に「ふるさと」「流浪の民」と続きます。私たちの世代にもなじみのある曲となっており、素晴らしい曲はいつの時代にもその輝きを失わないことを感じさせられます。また、歌詞の内容にメッセージ性のある楽曲も多く取り上げられ、多感な時期の生徒たちが歌詞の内容を深く味わい、自分の思いを歌に乗せ、心を込めて歌う姿が見られました。

合唱のほかにも合奏が４校あり、全員合唱の伴奏にも力を貸してくれました。そのうちの３校は吹奏楽部で、吹奏楽によるマーチングも披露されました。また、おはやしも披露され、市立養護学校の生徒たちによる演奏で地域の神社のお祭りを題材に取り上げています。

スライドにあるのは、小規模校の全校生徒による合唱です。学年の枠を越えて、気持ちをそろえて合唱している様子が伺えます。

次に、マーチングドリルの発表の様子です。ハーモニーだけで

なく、視覚的にも魅せてくれました。

次に、先ほど紹介したおはやしです。翌日の「ちしろまつり」でも立派に発表されたと聞いています。

全員合唱では各校の音楽主任の教員たちがステージで歌い、合唱をリードします。また、吹奏楽の伴奏でいつもとは違ったダイナミックな合唱がホール全体に響きわたりました。

今後の予定としては、参加生徒全員の投票による「ナイスハーモニー賞」を決定します。各グループで３校程度授与します。本日、受賞校が決まったという連絡がありましたが、すぐに発表できなくて申しわけありません。また、生徒の感想文を集約し、その成果について明らかにしていきます。

音楽発表会で感じ取ったものは、目には見えないものかもしれませんが、生徒の心に何かを残してくれたものと確信しています。

明 石 委 員　お願いなのですが、できれば教育センターで調査をして欲しいのですけれども、この合唱コンクールでナイスハーモニー賞をもらった学校がありますよね。その学校は校内暴力やいじめ、不登校が少ないというデータが多分あると思うのですが、その辺のところを実証的に検証してほしいというお願いです。よく言いますけれども、中学生で合唱コンクールが盛んな学校は非常に子どもが静かで学級全体がまとまるそうです。

もう一つは、秋は菊の大輪がありますよね。玄関に菊の大輪のある学校はいじめが少ないそうです。また、学校の門に鯉やメダカがいると中学生は落ち着くという経験則がありまして、広島の中学校は菊づくりで校内暴力を直したという実績があるのですが、果たしてこの千葉市でそのようなことが言えるか言えないか、そういう課題を持って教育センターが研究すると良いかなと思います。せっかく全中学校が参加していて、去年は私も参加して非常に感心したのです。声楽といいますか声を出す人は明るくて陽気なのですよね。体が楽器ということは非常に健康的で、学級が和やかになるということが言えるのですよ。ただそれを、数字で出るか出ないか、データを持っておくと良いかなと思います。そのような励みがあれば、中学校もそれに向けて練習すれば良いということが言えますので。それは指導課では難しいでしょうから、そのために教育センターがあるので、千葉市の課題に基づいてやって欲しいと思います。

和 田 委 員 長　問題の多い学校は、合唱にしても吹奏楽にしても音楽で頑張

っていこうということはよくありますよね。それが本当に効果があるのかということがわかれば、また今後の課題になるかと思いますが。

今、ナイスハーモニー賞という話が課長からもありましたが、これは子どもたちの投票によって決まるわけですよね。この子どもたちの投票によって決まる学校と、毎回参加している講師が見ている、「この学校はうまかったな」というのは大体一致するものなのでしょうか。

山本指導課長　和田委員長が視察したのはＢグループで、私はＢグループは視察していませんが、真砂中学校、高洲第二中学校、稲毛高等学校附属中学校がとても良かったと聞いています。皆さんの考えとほぼ同じだと思います。私はＡグループを視察したのですが、磯辺中、おゆみ野南中、千草台中、これらの学校は大変迫力があり、心に残りました。

人数が多く、さらに男声が半分くらいあると非常に響いて、子どもたちもナイスハーモニー賞に投票しやすく、クラスで２０人くらいの小規模の学校が出てきて幾ら頑張っても、あの会場では響かなくて選ばれないようなことはどうしてもあるかと思います。

この音楽発表会は各学校の代表が出てきています。出演者は一生懸命に取り組んで、明るい楽しい学校を作っているのではないかと私は思っています。

和田委員長　わかりました。やはりその学校の代表が出てきているだけあって、きっと耳も肥えているのですね。うまいなというのがよくわかってくれるのですね。

ナイスハーモニー賞にはクラスの編成が多い学校が選ばれやすいという話でしたが、例えばこのナイスハーモニー賞以外に、講師奨励賞のようなものを作って、少人数編成の学校にも奨励するというアイデアなどはどうでしょうか。

山本指導課長　すばらしいアイデアだと思いますので、検討したいと思います。

内山委員　私は何事もそうだと思うのですけれども、早朝練習をやるために中学生は早く学校に来るのです。１か月半くらいですか、ずっと朝練習をやって、それで臨む。そこに大きな意味があると思うのです。大会当日は、スポーツもそうですけれども、１日で終わりですよね。長い間の練習が一体感を持っていて、表現された

場を見ていますと、どこにいじめがあるのだろうかと感じます。皆さん一生懸命やっていますね。企業でもやはり体育文化活動にお金を出さなくなったのですよ。明るくないですね。やはりもう少し仲良くやるような雰囲気が必要だと思いますね。

小 西 委 員　先ほど学校の代表が来ているということだったのですけれども、プログラムの中の各校の発表で、学級、学年、全校、クラブ、有志と書かれているのですが、学年と全校というのは、どのように９校、２校という数字が出ているのか少し教えていただきたいのですが。

山本指導課長　各学校で、校内の音楽発表会、合唱コンクールを行っています。市民会館や、美浜の文化ホールなどを使用し、大々的に行っています。そこで、大きい学校は校内で１位になったところがこの音楽発表会に出ると決まっているところもありますし、そうではなく、有志を集めてこの発表会に出るという学校や、人数が少ないので、学年で出演する学校もあります。更科中など小さい学校は全員で出ようというところがあり、各校の発表で学級３９校、有志３校は、学校の考えで今回出てきて、このような数になりました。各クラスがすごくまとまって、１か月半くらいクラスの学級経営というか、クラスの団結を深める上でも、校内での音楽発表会が非常に充実していると聞いています。

和田委員長　私も地元の中学校の合唱コンクールに行きました。やはり非常に熱心で、また１年生の男子生徒が声変わりをしていないので、ソプラノにいたりしてかわいいのですけれども、高学年になると非常にまとまってきて、それを１年生が見るというのも非常に良い学習の場になると感じました。

　先ほども話にありました全員合唱なのですが、実際にその半日のプログラムを通して聞いていると、全員合唱が多い印象を持ちました。ただ先ほど課長から説明がありましたように、「夢の世界を」が発声練習になっていたり、ほかの曲に関しても意味がありますので、必ずしも多いということを言ってしまって良いのかなというのは迷うところではあるのですが、生徒たちがきちんと歌える曲がやはり「大地讃頌」くらいしかないような状況で、ほかの曲は先生方が完全にリードして子どもたちはサビの部分だけしか歌っていないという感じでした。ですので、もしこれだけの曲をやるのであれば、もう少し練習を重ねるか、そうでなければ曲を絞るということも今後考えても良いのかなと。事情はある

かと思いますけれども、よろしくお伝えいただけますようお願いします。

報告事項(3) 平成２６年度千葉市中学校生徒会交流会について

和田委員長　指導課長、報告をお願いします。

山本指導課長　報告事項(3)「平成２６年度千葉市中学校生徒会交流会について」、報告します。

１１月５日に各中学校の生徒活動を一層充実・発展させることを目的に千葉市教育センターにおいて、千葉市中学校生徒会交流会を実施しました。

本交流会には、全公立中学校の生徒会長等５６人が集まり、各校における特色ある生徒会活動や充実を図っている取り組みの紹介に始まり、それに関わる意見交換などが行われました。参加した生徒は、後期の生徒会役員が中心であり、２年生が５２人、１年生が４人という構成で行われました。

今年度は同じ行政区や近隣の地域で生活する一員として共に手を携え、協力し合っていくための意識を図るために、「生徒自らのよりよい学校・地域づくりを目指して」という共通テーマのもと、行政区を中心とした１１のグループによる分科会を実施するとともに、全体会においては分科会で話し合った内容についてシェアリングを行いました。

初めに、中学生が進行を務めた開会行事で、市長から「本交流会を通して、自治の始まりである生徒会活動を行っていく上での悩みや課題について共有するとともに、それぞれが工夫して実践していることを、自分の学校に取り込んでいくためのハブ役として役割を期待している。そして生徒会活動に楽しくやりがいを持って取り組めるように、何かを得て学校に持ち帰ってくれることを楽しみにしている」といった趣旨の挨拶がありました。

その後の分科会では、近隣校同士で各校の取り組みの紹介をもとにした意見交換が活発に行われました。「意見箱」や「生徒会だより」の活用方法、ボランティア活動や募金活動などについての実践方法について具体的な意見交換がなされていました。自校の取組みの改善や一層の充実を図るために、各校の発表を真剣に聞いたり質問をしたりする様子がどのグループも見受けられました。さらには生徒会活動を推進していく上での共通の課題や方策について自由な協議が行われ、生徒会役員の活動時間や取り組み姿勢、広報活動の重要性について共通理解が図られるとともに、

いじめの予防に向けて生徒自らが主体となってどのような取り組みができるかということについても話し合いが進んだグループもありました。また「生徒会だより」の交換を行っていくことを決定した区もあります。今後の交流がより深まっていくことが期待されます。加えて、同じ時間に引率職員による分科会も行い、生徒会活動に関する意見交換が熱心に行われていました。

全体会では各グループが意欲的に話し合った内容が具体的に報告されるとともに、「他校の取り組みを積極的に取り入れて、自分の学校の生徒会活動をもっと活発にしていきたい」といった建設的な意見や、「これまでの取り組みが不十分であったことに気がついた」、「これまでの活動に自信を持てた」といった感想も発表され、自校の取組状況を再認識するきっかけになったことも確信できました。

今後も本交流会の効果を継続できるように、今後の生徒会活動に取り入れたいことや、参加後の感想を記入した「千葉市中学校生徒会交流会に参加して」をイントラネット版でキャビネットに掲載する予定です。また、その後の実践の様子について取りまとめ、各学校にフィードバックしていきたいと考えています。

今年度は５回目の取り組みとなりましたが、各校の生徒会活動の交流を通してさらに具体的な成果が上がるよう、学校現場に即した話し合いのテーマの設定や、内容の改善に努めるとともに、活発な議論が進むよう、話し合いの形態などについて工夫を凝らしていきたいと思います。

内 山 委 員　写真を見ますと、女子が目立つのです。全体の割合としてはいかがでしょう。男女の比率はわかりますか。

山本指導課長　すみません、後で調べます。

中 野 委 員　今の内山委員の発言に関連するのですけれども、当日、４から６人で１グループだったと思うのですが、やはり女の子の入っているグループのほうが活発ですよね。４人が全員男の子のグループがあったのですけれども、最後のほうは盛り上がりましたが、最初は盛り上がりがもう一つ無かったような感じでした。それはそのグループの各学校の生徒会の代表役員がたまたま男の子だったので仕方ないのでしょうね。

また打瀬中学校では新入生が入学すると委員会活動から部活まで全てわかるような冊子を作っているそうです。学校によって随分レベルが違うと思いました。全体としては、とても皆さん仲

良くいろいろ意見を出し合って、非常に良い会だったのではないかと思いました。

和田委員長　交流会という名前のとおり、本当に情報交換の場になっていると思いますし、今年は引率の教員の分科会があったという話でしたが、これは初めてですか。

山本指導課長　一昨年も試みたのですが、会場の都合で去年はできませんでした。今年はもう一度実施し、若い教員からベテランの教員まで良い経験の場になったのではないかと思います。

小西委員　引率の教員の分科会というのは、具体的にどのような内容について話し合われるのでしょうか。

山本指導課長　引率の教員は生徒会の担当がほとんどですので、どのように指導していくか、子どもたちの生徒会をどのように自主的に運営していくかということが中心であったと思います。その中で、子どもと同じように「うちはこういうことをやっている」、「こういう工夫をすると良いよ」という話が出ておりました。

小西委員　事後の取り組みなのですが、「千葉市中学校生徒会交流会を終えて」をキャビネットのイントラネット版に掲載にするとあるのですが、これは各中学校で生徒たちが自分たちで見ようと思えば見られるのですか。

山本指導課長　子どもたちは見られません。教員が見られるようになっています。ただ、子どもたち同士が交流する上で工夫していかなければいけないと思いますから、打瀬地区の子どもたちが、学校の教員が作っているホームページに生徒会のコーナーを作ってそこに載せればみんなで見られるという話をしていましたので、そのホームページの中に生徒会活動について載せることも良いのかなと今考えているところです。

小西委員　せっかくの交流会で話した内容を生徒会で終わらせてしまうのではなくて、一人でも多く全校の生徒に伝わる形で何か取り組みをして欲しいと思います。よろしくお願いします。

和田委員長　このイントラネット版のキャビネットでは先生はもちろん見られるということですから、顧問の先生が見て、それを生徒会役員に伝えるということはいつでもできるということになりますね。

報告事項(4) 平成２６年度前期ライトポート・グループ活動諸行事について

和田委員長　教育センター所長、報告をお願いします。

遠藤教育センター所長　報告事項(4)「平成２６年度前期ライトポート・グループ活動

諸行事について」、報告します。

教育センターの教育相談部門では、学校への不適応を起こしている児童生徒に対して系統的、段階的指導・援助のためのサポートプログラムをもとに学校生活への復帰をめざした支援を行っています。その中でたくさんの人との関わりやつながりを持って適応力や自己肯定感を高め、ライトポートやグループ活動の連携を図るためにジョイント事業を計画的に実施しています。

前期ジョイント事業の中心行事である合同遠足、スポーツフェスタ、長柄のジョイントキャンプについて報告します。

まず初めに、ライトポート・グループ活動の合同遠足です。今回初めてグループ活動のメンバーが加わり、参加児童生徒は４８人でした。この遠足は各ライトポートとグループ活動に参加している子どもたちをつなぐ第１段階の行事となっています。科学館での展示、ワークショップの参加・体験を通じて、科学に親しむ心を育てるとともに、集団での活動を通して、児童生徒の親睦を図ることを目的としています。昼食後、子ども交流館のアリーナで交流活動を行いました。これは初めての試みでした。ライトポート・グループ活動をつなぎ、「かかわる」というねらいに迫ることができました。

次に、スポーツフェスタについてですが、９月１７日に実施しました。スポーツフェスタは平成１８年度から始まった行事で、今年度が９年目となります。また、今年初めて千葉市子ども交流館のアリーナを会場にして実施しました。スポーツフェスタは、スポーツを通して各ライトポート・グループ活動間の交流を深め、ジョイントキャンプへの意欲化につなげることを目的としています。子どもたちは円陣バレーやドッジビー、ピンポン玉リレー等の競技の練習を通して、各施設内の人間関係を深めるとともに、各ライトポート・グループ活動に所属するメンバーが仲間であるという認識を深めています。

続いて、第１回長柄ジョイントキャンプについてです。このキャンプは豊かな自然の中で、様々な体験活動を通して、不登校児童生徒の自主性、社会性を育み、学校生活への復帰を手助けすることを目的としています。このキャンプの「ジョイント」は、「心をつなぐ」、「教室をつなぐ」、「学校をつなぐ」という意味で、その願いを込めて「ジョイントキャンプ」と命名しています。今年度で１０年目となりました。初日はアイスブレーキングを含め

て、出会いのゲームで参加者同士の関わりから始まり、夜は皆既月食が見られた日でしたので、月食の観望を含めて、５つのプログラムから体験したいことを自分で選んでその活動を楽しみました。２日目は生パスタづくり、ネイチャーゲーム、キャンドルサービスなど、色々なプログラムに挑戦しました。その中でテーマである「自然の中で発見」、「自分、仲間、そしてチャレンジ」を意識して、この目標達成に向け、子どもたちがそれぞれに取り組みました。資料の振り返りにありますように、今まで気づかなかった自分を発見し、また新しい仲間と協力していくことの楽しさや大切さを体験を通して学ぶことができ、大きな成果を上げたと思います。教育委員を初め、各学校の校長、担任の視察・参加も多数受け、子どもたちとの楽しく語らう姿も見られ、多くの方々に見ていただいたことで、子どもたちにも励みになりました。

最後に今後の予定なのですが、イオンでの職場体験は既に終了しましたが、後期もたくさんの人と関わりやつながりを持って、一人一人の適応力や自己肯定感が高まるように、計画的にジョイント事業を実施していきたいと思っています。

和田委員長　参加者なのですが、３つの行事の中ではスポーツフェスタが一番ハードルが低いのか、一番参加者数が多いようなのですけれども、全体の在籍者数に対する割合はそれぞれどのくらいになるのでしょうか。

遠藤教育センター所長　合同遠足は８４％くらいの参加率です。スポーツフェスタは８０％です。そのときの在籍者数、通級者数が違いますので、人数が増えても値的には余り変わらないです。それから、ジョイントキャンプについては６３％。やはり宿泊を伴うので、どうしても難しい面もあります。

和田委員長　わかりました。ありがとうございます。パーセンテージで言っていただくととてもよくわかるので、できましたら今後、割合も併記して資料に入れてもらえるとわかりやすいと思いました。

スポーツフェスタが意外と少ないと思ったのですが、今パーセンテージが高いと伺い、やはり一番ハードルの低い行事なので、できればここは全員来て欲しいという希望はあります。励ましのほど、よろしくお願いしたいと思います。

内山委員　スポーツフェスタを見学したのですけれども、子どもたちはみんな激しく動いていましたね。びっくりしました。やはりあのような場では、あのような雰囲気になるのでしょうか。本当に嬉

しく思いました。

また、ジョイントキャンプなのですけれども、私も何度か参加していて、なかなか声をかける勇気がないわけではないですけれども、今回できるだけ子どもたちと言葉を交わしました。でもなかなか難しい感じがしますね。やはり周りで支援している職員もボランティアも含めて、子どもたちそれぞれの個性を非常によく知っていますからね。私はわからないので、言葉を交わして交流できない場面が幾つかありました。全体には素直に応じてくれて楽しい思いをしました。

報告事項(5) 関東地区教育研究所連盟第８６回研究発表大会について

和田委員長　教育センター所長、報告をお願いします。

遠藤教育センター所長　報告事項(5)「関東地区教育研究所連盟第８６回研究発表大会について」、報告します。

教育センターにおいて、研究発表大会が１０月２４日（金）に開催されました。本研究発表大会は各教育研究機関の連絡・連携を密にして、調査研究の進展を図り、教育研究の振興に寄与することを目的として毎年開催されています。今回は加盟教育研究所５７機関中３５機関から９７人の参加がありました。開会式で志村教育長より祝辞があり、研究発表大会が始まりました。その後、教科等教育部会、教科外教育部会、特別支援教育部会、教育相談部会の４つに分かれて日ごろの研究成果をもとに熱心な協議が行われました。教科等教育部会では、ベネッセ教育総合研究所の調査によると、教員はＩＣＴの活用に前向きに取り組んでいるが、ＩＣＴの効果を最大限に発揮しているという認識に達していない状況とのことで、活用について模索していく必要があるという問題提起がありました。県の総合教育センターからは、児童生徒の思考力を伸ばすために、問題解決的な学習を児童生徒の変容化という視点で捉え、受動から能動へと変容する学習指導方法のあり方についての発表がありました。

教科外教育部会では、県の総合教育センターから、協働学習の場面における児童生徒の豊かな表現力とコミュニケーション能力を育てるためのＩＣＴの効果的な活用についての研究、本教育センターからＩＣＴ機器を効果的に活用した協働的な学びの授業の実践と、タブレット・ＰＣの特徴を生かした学習についての発表がありました。

特別支援教育部会では、さいたま市の教育研究所から、共生社

会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための、特別支援教育に関わる教職員の専門性を向上させるための研修についての取組みの成果、また、本市の養護教育センターから、学級事務や特別支援学級特有の評価等の指導など特別支援学級新担任が抱える課題を解消するためのハンドブックの作成と、その活用についての発表がありました。

教育相談部会では、千葉県子どもと親のサポートセンターから学校不適応の生徒の対応について、実態調査をもとに必要な指導と教員の支援についての取り組みとその成果、本センターからは、学校不適応の要因を解消するためのマインドアップタイムにおける現状把握、見立て、指導補助の決定、実践などについての研究成果の発表がありました。

午後に行われた講評では、国立教育政策研究所の大金部長から、提案された発表について研究の意義や成果、課題解決に向けての方向性をご示唆いただきました。また、講演では神戸学院大学の立田慶裕教授より、学校現場の指導でよく用いる言葉や言葉の本質、意義など多くの示唆を受ける話をいただきましたので、教育センターでの研究、研修等に生かしていきたいと思います。

来年度、８７回の研究発表大会は浜松市の教育センターにて開催予定になっています。

明 石 委 員　私も参加して、非常に中身のある研究会だと思っています。それで、検討して欲しいのは、もう力があるので、教育センターの職員たちに講演はいらないだろうと思っているのです。今さらなぜ講演を聞かなければいけないのか。そうすると午後の予定で一番欲しいのは、集まった９７人のスタッフたちのネットワークづくりだと思います。結局最後は人と人とのつながりなのです。うちのセンターはこういう課題抱えていて大変であるとか、市の課題にどうやって応えていくかなど。センターの平均勤務年数はだんだん短くなり、多分２年か３年で現場に出ていくのではないでしょうか。事務方の職員とセンターの職員は在職期間が異なっても、やはり研究するのに５年くらいいないと課題に応えていけないと思います。例えばそのようなことを午後の段階でお互い非常に現場と同じように教育センターも忙しくなってきて、行政の下請けをしているのかとか、意見交換すると良いと思います。何かそのような研究所自身の抱える課題がもっともっとあると思うのですよ。それで国立教育政策研究所とどうやってリンクして

いくか、そういう議論を午後にやったらどうかなと感じました。だから午前中の部会は非常におもしろかったのですけれども、午後は、もう今さらという感じがしました。所長、いかがですか。

遠藤教育センター所長　５月に第１回の総会と研究協議会が静岡にて１泊２日で開催され、そのときは割と時間がとれますので、第１回にいろいろなことをみんなで情報交換したほうが良いということで、５月に情報交換を行いました。今回は日帰りということになっています。せっかく来たからには今までの研究も絡めて、深めたいということで講演会になっています。今後総会あるいは委員会で検討してもらうように呼びかけていきたいと思います。

和田委員長　皆さん非常に活発な意見交換をしていて、自分のところの状況、それから他市の状況を非常に熱心に聞いている姿が印象的だったのと、あと確かに明石委員が言うように、もう今さら講演する必要があるのかという感じもしたのですが、感想を見てみると講演がとてもありがたかったという人も中にはいるようでした。やはりもっとレベルの高い講演を望んでいる方もいたり、また色々なレベルでの気づきもあるのだと思いました。センターの方たちの集まりなので非常に熱心で私も驚かされました。準備が大変だったと思います。お疲れ様でした。

報告事項(6) 長柄ハッピーキャンプについて

和田委員長　養護教育センター所長、報告をお願いします。

山本養護教育センター所長　報告事項(6)「長柄ハッピーキャンプについて」、報告します。

長柄ハッピーキャンプは通常の学級に在籍するＬＤ、ＡＤＨＤなど発達障害等のある小学生のための宿泊体験活動です。秋休みの１０月１０日（金）から１３日（日）の２泊３日で実施しました。平成１７年度から実施し、今年度で１０回目となります。平成２４年度からＬＤ等通級指導教室設置校校長連絡会との共催事業としました。目的は、発達障害等のある児童を対象に、集団生活を通して社会性を向上させ、通常の学級での適応力を高めることにあります。

参加児童は養護教育センターで行っている発達障害等の子どもたちのグループ活動参加者３、４年生の希望者が５人、ＬＤ等通級指導教室児童３、４年生の希望者２８人の合計３３人です。養護教育センター職員９人、そしてＬＤ通級担当教員１０人、それからボランティア１１人、合計３０人が引率してきました。

主な活動内容はウォークラリー、カレーづくり、クライミング

ウォール、バンダナづくり、キャンドルサービス、紙飛行機大会などです。活動の一つ一つのねらいを明確にして、一人一人の子どもが目標を持てるようにしています。集団生活を通していろいろな場面で社会性を学んでいます。自分のことは自分でやる、片づけられない子どもたちも時間をかけてしっかりとやっていました。トラブルがあっても自分で乗り越えていました。最後までやり抜く成功体験を積んで自信をつけること、これが一番大事だと考えて実施しています。

キャンプ期間中、内山委員を初め、ＬＤ等通級指導教室の設置校の校長あるいは参加児童在籍校の校長、担任等、たくさんの教員が参観し、子どもたちを励ましてもらいました。

１０回目を迎えた今回のハッピーキャンプですけれども、子どもたちは年々落ち着いて参加しているのを実感しています。これは小学校の通級指導教室の６学級のうち４学級に複数担任が配置されて、事前指導での小集団活動など時間をかけて取り組んでいる成果の一つと考えています。キャンプの活動の中で集団での決まりを守ったり、学級ごとに話し合って、協力して役割を果たしたりする中で自信をつけていく姿がたくさん見られました。３、４年生と続けて参加できた子どもは、昨年はできなかった友達の話を聞く、ごめんなさいを言うなど、今年はできたなど成長を振り返ることができていました。

保護者にとっても５、６年生の宿泊活動への手ごたえを感じることができたようです。また来所相談の折、写真を見せて保護者と話をする中、学校への不満を感じていた保護者の方も、休みにわざわざ校長や担任が来たということから学校との話し合いがうまく進んだ例もありました。

キャンプでつけた力を家庭や在籍校での生活に生かしていけるよう連携を強めていくことが今後の課題と考えています。

続いて、昨年度実施しましたハッピーキャンプについての効果測定調査の報告をします。参考資料もご覧ください。

目的は、長柄ハッピーキャンプにおける教育効果について調査を実施し、その実態と今後の課題を明らかにすることです。５年生の移動教室、６年生の農山村留学にどのように影響したかを明らかにしたいと考えました。

方法は、１つ目に２３、２４年度のハッピーキャンプに参加した５、６年生児童のうち、通級指導教室に通っている子ども、養

護教育センターに継続相談している子ども２３ケースにアンケートをとりました。また、２つ目に、２３、２４年度にハッピーキャンプに参加した５、６年生が在籍する学校３６校にアンケート調査をしました。

その結果が次のとおりです。詳しい内容については、お配りした資料の実際のアンケートに調査項目等もつけてありますのでご覧いただければと思います。

まず、子どもと保護者のアンケートの結果です。子どもには通級担当、相談担当が聞き取り調査をしました。ハッピーキャンプに参加したことで移動教室や農山村留学において役に立ったことやよかったことがあったか。「とてもよかった」から４段階評価で「全く役に立たなかった」までの４つの中から選んで丸をつけ、その内容について聞き取ったものです。

また、保護者には、「お子様は全ての活動に参加できたか」という集団参加、そして「友達と仲よく参加できたか」という対人関係、そして、「身の回りのことが一人でできるようになったか」、生活面の項目を、同じように４択で聞き、それにエピソードを加えてもらった調査をしました。

その結果、８割程度の子どもが「よかった」、「まあまあ良かった」と選択していました。保護者のハッピーキャンプの満足度は高く、「とてもよかった」、「だいたいよかった」で１００％、そして保護者の自由記載の中で、「もともと不安が強い子であり、ハッピーキャンプは２回とも泣いていた。でも移動教室では安心して参加できた。来年は違う場所になるが、全く不安がっていない」というような記述がありました。また、キャンプでは泣いていても、次年度に生かせることをそのようなことから知ることができました。子どもたちの役立ち度も高いのですけれども、実際は通常学級でのペースについていくことに困り感を持つ子どもたちも多いと考えられます。それだけに、宿泊活動での成功体験が本人の自信につながり、周りの子どもたちの見る目も変わってくると考えています。

次に、ハッピーキャンプ参加児童のいる学校へのアンケート調査の結果です。「全ての活動に参加できたか」という集団参加、「友達と適切にかかわって参加できたか」という対人関係、「身の回りのことが一人でできたか」という生活面の項目で、やはり４択での回答をまとめました。

学校のアンケート結果として、３つの項目とも「ほとんどできない」という評価はありませんでした。特に集団参加の点ではキャンプの経験が自信を持って活動できる姿に結びついていると考えています。対人関係、生活面に関しては、本人、家庭への継続的な支援が重要と捉えています。

これからもキャンプでの成果を生かしつつ、グループ活動や通級指導教室での指導を充実させていきたいと考えています。

明 石 委 員　意見ですが、非常に貴重なデータですよね。私の描くイメージはこういうイメージなのです。３、４年のときにハッピーキャンプへ行って、５、６年生で移動教室と農山村留学がありますよね。それにソフトランディングできるという事柄のエビデンスを示してくれた。そういう研究スタイルを出してくれると、来年度の予算をとるときに、財政課と折衝できるのです。だから他のところもぜひこういう形のデータを出して、ガードの堅い財政課を説得しなければいけないのです。まず教育委員会の予算担当を説得して、次に市長部局の財政課を説得しなければ予算は出ませんから、ぜひこういう形をやってもらうと良いですね。

内 山 委 員　私も２日目のクライミングウォールを見学したのですが、１つは子どもたちが、明るい雰囲気で活発にやっていましたね。もう一つはに「引率職員等　３０人」と書いてありますが、参加者一人に、１対１みたいな関係なのですね。これは非常に手厚い支援体制を組んで、子どもたち一人一人の気持ちなり動作なり、状況をよく観察しながら支援していて、例えばウォールに登るということもしない子もいるのですね。写真撮って遊んでいるのです。それはそれなりにまた励まして、「どんなの撮れた」とか言って、非常に手厚い体制で臨んでいると思いました。お金はかかるかもしれませんが、ぜひ頑張って続けてやってもらいたいと思います。よろしくお願いします。

和田委員長　私も本当に素晴らしい調査をしてもらえたと思いました。その中で１点だけ、少し気になったのが、資料の児童効果の部分で、これが８割の子どもが「よかった」と言っているのはすばらしいことだと思うのですが、逆に言うと２割の子どもたちがまだ「よくなかった」、「あまりよくなかった」と感じているのは、これは自由記述なので、その理由はわかっていますか。

山本養護教育センター所長　特にあるのは、やはり親と離れた不安感というのが非常に強く、それと夜、おねしょをするなどの不安感から、そのような子

どもの言葉になったかと思います。

和田委員長　わかりました。それも経験することによってひとつずつ超えていく部分だと思いますので、長い目でご支援をお願いしたいと思います。

報告事項(7)　千葉市科学フェスタ２０１４メインイベント及びサイエンスクラブアセンブリーの開催について

和田委員長　生涯学習振興課科学教育推進担当課長、報告をお願いします。

西村科学教育推進担当課長　報告事項(7)「千葉市科学フェスタ２０１４メインイベント及びサイエンスクラブアセンブリーの開催について」、報告します。

最初に１０月１１日、１２日の２日間、土日になりますけれども、きぼーるで開催した千葉市の総合的な科学の祭典である科学フェスタ２０１４、それから１８日、千葉市教育センターで開催したサイエンスクラブアセンブリーについて報告します。

最初に科学フェスタについてです。写真にあるのは、初日の１階のきぼーる広場の状況です。ついたてがありますが、一つ一つがブースと呼ばれているもので、発表団体の一つのセクションとなっています。次に資料ですが、フェスタそのものについては今回で４回目になります。非常によい天気であったのですけれども、台風が接近してくるということもあったのか、初日の出足がやや悪く、心配しましたが、年々入場者が増え、結果的には科学フェスタの定着が伺われました。また出展イベントの数なのですが、大体５０くらいの数になっており、これはほぼ昨年度と同様です。出展イベント数等についてはきぼーるの物理的なスペースの面もあるので、限界かと思っています。

続いて、当日の様子ですが、今回のフェスタの初日の開幕式においては総合展の科学論文、工夫作品から科学館賞、教育長賞の表彰等行いました。また今回、プラネタリウムの機器のリニューアルがありましたので、その紹介に関して大型テレビを用いたことが特徴的であったと思っています。団体については、体験や工作を伴うブースが多いのですが、非常に大いににぎわいました。初日で２日分の材料を１日目で使い果たしてしまったというようなブースも複数ありました。また、今回最新の科学に関して、３Ｄプリンタでこの写真のように、これは頭のモデルになっていますけれども、臓器のモデルなど最新の技術の紹介、それからiPS 細胞について、専門の先生の講演等もありました。さらにステージなどではサイエンスショーや、県外の団体からの展示も幾

つかありました。今回の特徴的なこととして、余り広くはありませんが、アトリウムの２階、３階のスペースの展示が充実しており、そこでかなり多くの人がブースに集まっていたと感じました。

今回の科学フェスタでは発表団体間のコミュニケーションの拡大、科学をもとにしたネットワークづくりに重点を置いたことが今回のフェスタの取り組みの特徴ですが、１日目の夕方に、各発表団体のブースを回る交流会、その後には懇親会等を設定しました。それから、サイエンスコミュニケーショングランプリについては、コインの投票でグランプリ賞を決めるのですが、今回初めてフェスタの趣旨や意義につながる発表をした団体に審査員特別賞を設定したところが今回の特徴です。

次に、来場者に対するアンケートについてですが、回答数は２０８件です。アンケート結果のグラフがありますけれども、まず横棒のグラフは年齢構成を示していますが、小学生までと３０、４０代、が非常に多くなっています。それから「誰と来場したか」という質問に対して、家族が７５％です。したがって、このフェスタについては小学生を中心とする親子が多いことがアンケートの結果からわかりました。

それから市内外からの来場者数については、市内が７割、市外からが３割ということで、市外からも結構来ることがわかります。

また、「参加したいと思う科学イベントは」という問いに対して、小学生等の回答者が多いこともありますけれども、科学実験、または工作教室に参加したいという意見、要望が高いようです。

今回回答のうち９７％が「またフェスタに来たい」、「またぜひ来たい」と、進んで「行きたい」と回答しています。ですので、９７％の方がそのように思っているということは、来年度以降リピーターとして、フェスタに来ていただけるのではないかと思っています。それと同時に、フェスタに関しておおむね満足していただいたと考えています。

来場者の男女比ですけれども、女性のほうが多いです。小学生のお母さんが多いことも要因ではないかと思っています。

また、ほとんど科学イベントに参加していないという方が３分の１ほどいます。普段はほとんど参加していなくてもフェスタに来たということがありますので、このような方が参加するということは、やはり科学振興という意味では、大きな役割をフェスタが果たしていると思います。

それから、どこで科学フェスタを知ったかと問いかけた部分については、チラシが最も多いです。これは全小中学生、市立高校も含め全家庭に配布しており、各学校に苦労をかけているのですが、やはりその部分が一番大きく、それを通じて保護者の方と参加したということが多いです。

続いて、サイエンスクラブアセンブリーについて報告します。これは科学部活性化事業の一環として行っているもので、１０月１８日（土）に教育センターで行ったものです。市内中学校１５校に科学部が設置されており、そのうち８校が今回集まって、交流・発表を行いました。参加生徒数は６５人、それから顧問は９人でした。さらにコメンテーター、役員等含めると１００人を超える規模の事業です。人数だけ見ると少ないように感じるかもしれませんが、現在、千葉市内に３００人ほど科学部員がいます。そのうち、１、２年生だけになると２００人程度ですが、そのうち６５人が来ていますので、３割弱程度の参加になります。

内容は、午前中に各学校の科学部の年間の活動報告を中心に発表しました。写真について、これは花園中学校ですが、科学館長賞を受賞した科学部員の２人がラジコンの飛行機について実物を使った非常に丁寧な発表をしました。午後は、まず大高館長から各部活動について講評しました。その後、今回は「みんなで科学実験」ということで、各学校が簡単な実験や工作を紹介して、みんなが工作したり実際に実験したりする、動きのある活動としたのが今回の特色です。写真にあるのは、千葉大学附属中学校の生徒が乗っているホバークラフトでそれにみんなで乗りました。それから、生涯学習振興課で企画した特別実験を行いました。ノーベル賞を受賞した関連から青色のＬＥＤに関することを行ったものです。赤、青、緑色の３色のＬＥＤの光を混ぜて、いろいろな色が出せることを確かめたり、影について実験をしました。また、「ヘロンの噴水」など部員によるいろいろな実験の紹介や、紙でつくったトンボ、折り紙になっている円形紙飛行機など、そのような使い方を工夫した工作等も楽しみました。

最後にアンケートの結果についてです。ほぼ全員６４人から集計したアンケートの結果、「楽しかった」、「ためになった」との問いに対して、「とてもそう思う」、「そう思う」が両方とも合わせて９０％を超えており、９割以上の生徒が、楽しくためになったと回答しています。

次に、感想ですけれども、やはり正直に書かれているところがあり、自分の学校はもう少し活動すべきだなと思った、ヒントになるものがたくさんあったといったような感想もあって、今後の科学部の活性化につながると考えています。

また、この「サイエンスクラブアセンブリー」という名称なのですが、少し長いのですね。色々説明する上で、これは何なのということを聞かれることが多くありましたので、「千葉市科学部交流発表会」など、来年度名称については少し検討したいと思っています。

和田委員長　「千葉市科学部交流発表会」も結構長い気がしないでもないですが。私は「サイエンスクラブアセンブリー」は、かっこ良くて良いなと個人的には思っています。

明石委員　科学フェスタは非常に頑張ってくれまして、とりわけ嬉しかったのは、市外から３割来たという。もっと千葉市は自慢して良いと思うのですよ。９６万人の市でありながら、市外からの参加者が３割という、このようなイベントはもっとお金をかけても良いかなと思います。

２点目にサイエンスクラブアセンブリーについて、大高館長が非常に熱心で、いくつか質問しました。千葉市立中学校にある科学部１５校で、８校参加しましたが、科学部は全国的に多いのか、少ないのかと聞いたら、全国のデータでは中学校では１割くらいしか設置していないそうです。千葉は３割くらいあるので、まだ良い方だけれども、やはり全国的に中学校の科学部がものすごく衰退したそうです。どうしてかと聞いたら、意見としては、理科の先生、若い先生が運動部の活動で全部どこかにとられてしまう。そうすると科学部の活動もやりたいけれども掛け持ちできないので、結果として科学部のほうが手薄になりかねないらしく、これは全国的な傾向らしいのですよ。

もう一つは、科学部に入る人は、性格が暗いというイメージを持たれる。部活動でどこも入るところがなくて、最後に来るという、何か中学生文化があるらしいのですよ。私はそれを聞いてショックを受けています。そうかなと思ったりしたのですけれども、せっかく千葉市は科学フェスタで小学生もあれだけ参加しているのに、なぜ中学校で衰退するのか。千葉市はまだ３割の中学校で科学部がありますけれども、全国的に非常に衰退しているということは、私は危機意識を持っていまして、ぜひ千葉市あたりが

全国の先端を切ってサイエンスクラブアセンブリーというのはこれだけ良いのだということを広めても良いと思います。私も参加させてもらってＬＥＤの実験など、楽しいのですよね。

和田委員長　科学部員が暗いというイメージがあるとのことでしたが、私も来ている生徒に聞いてみたら、「他に入るクラブがどこもなかったから科学部にしてみようかなと思った」と正直に言ってくれる子がいまして、確かにそうなのかとも思いましたが、私たちの時代では、例えば運動部と文化部を兼部する生徒が結構いたのです。運動部が月水金で、文化部が火木のように。例えば運動部に入っている子でも科学部にも入れるというようなことは無理なのでしょうか。話がそれますけれども、いかがでしょうか。

津野保健体育課長　部活動については、子どもたちが好んで参加しているわけですけれども、文化系とあわせて活動することになると、実際に運動部の活動日が一般的に大体週に５日から６日となっており、その内３、４日充てることになると、全てが子どもたちの活動日となり、また休息の問題や、それから一方で習い事の問題もあったりしますので、なかなかその辺は難しいところもあると思います。しかし、工夫をすれば可能なのかという感じはします。

和田委員長　さらに少し話がそれてしまうのですが、先日子ども読書まつりで花見川図書館に行ったのですが、近隣の中学校の子どもたちで、科学部ではないのだけれども、有志が集まって昼休みなどに集まって活動していて、それぞれみんな写真部やテニス部など、ほかの部活動で活動しているということでした。そのような中でも科学に興味のある子どもたちが空いている時間に集まって、部活動まではいかない活動をしているという話を聞いて、とても興味深いと思いました。これからそのような形態もあっても良いのかなと感じましたので、広めてもらえればと思います。

小西委員　私もサイエンスクラブアセンブリーに参加したのですけれども、中学生たちがノーペーパーで堂々と発表していて、非常に感心しました。少し残念だったのは、目的の一つとして科学部同士の交流というのがあるので、発表するときに一人一人、ぜひ名前を名乗ってほしかったというのと、やはり中学生は恥ずかしがり屋なので、お互い名前を聞くのも少しやりづらいなという部分があるので、ネームプレートなどをその場だけでいいので準備しておいておくと良いかなと思いました。

　あと、個人的にＬＥＤの実験が非常に面白くて、１個２０円で

買えることにびっくりしました。ただ、このアセンブリーも科学フェスタも、科学部の生徒であったり、科学に興味を持っている、お子さんに興味を持たせたいという親が連れていく形で参加すると思うのですが、本当はもっと科学に普段接していない子や親が連れていける機会が少ないようなお子さんにもぜひこのような実験の楽しさを知ってもらえるような場がもっとあれば良いなと思いました。待っているだけではなくて、こちらから働きかける機会があれば良いと思いました。

和田委員長　小西委員と全く同じ意見です。私も毎年話していることなのですが、先ほどの科学フェスタの参加人数を見ても、年々増加してきたけれども、昨年、今年はそれほど増えてこなくなっているということで、これから新規に参加者を開拓するに当たって、やはり親子連れではない、保護者が連れてこれない子ども達に対しての働きかけが必要だと思います。ですので、これも毎度申し上げているのですけれども、かなり前に働きかけないと事業計画に入らないのですが、青少年育成団体などに今年度の終わりくらいまでには日程とあらましを、こども未来局のほうに積極的に提示して、保護者でない大人に引率してもらえるようなシステムを作ってもらえたらと切に思います。

内山委員　私も自分の体験から言いますと、やはりどちらかというとスポーツのほうが楽しかったですね。理科系・文科系は別にして、何かに興味を持たせて、楽しいことを覚えるためには、そのチャンスがいかにあるかではないかと思います。私も家庭では父親が化学会社に勤務していた関係で、薬品等による危ない実験もしましたが、楽しかったですね。楽しければやるのではないかと思います。そういうチャンスに恵まれるかどうかが、子どもたちにとっては大切だと思います。なかなか難しいかもしれませんが、ぜひそのようなチャンスを与えてあげたいと思いますね。

和田委員長　サイエンスクラブアセンブリーに関して、運動部は大会が年間を通してたくさんありますけれども、科学部は発表の場が無い部なので、ぜひこれはなるべく多くの部、今回来なかった学校にも参加してもらって、科学部の大会のような気分を盛り上げていってもらえたらと思います。

報告事項(8) まなびフェスタ２０１４の開催について

和田委員長　生涯学習振興課長、報告をお願いします。

増岡生涯学習振興課長　報告事項(8)「まなびフェスタ２０１４の開催について」、報

告します。

まなびフェスタは、毎年生涯学習センターの主催によって開催しているものです。やはり学習の成果を発表する場を設けますと、モチベーションも上がり、また、いろいろな団体が参加していますので、そのような方々の相互学習、交流の場等を提供することによって、市民の生涯学習活動の普及、振興を図ることを目的とした事業になっています。今年度については１２月６日の(土)、７日（日）に開催します。公募、施設ボランティア、ＮＰＯ、市の関係機関などの５６団体の参加を得て、生涯学習センターの主催事業と合わせて計６６の事業を実施し、アトリウムやホールでのコンサートのほか、上映会や市民団体による各種体験教室、展示発表会などを行います。詳細についてはお手元のリーフレット等をご覧ください。

また、今年度の特別企画ですが、１つ目として、お笑いや司会、映画監督でおなじみの北野武さんのお兄さんとして有名な淑徳大学の北野大教授をお招きした特別講演会、「食と水の安全性」を開催します。現代の社会での食の状況、食の安全と安心の違いなど、食の安全性確保のための方法について詳しく講演をいただきます。

２つ目に、テノール歌手大澤一彰氏によるコンサート「いま聴きたい世界の名曲」を開催します。大澤一彰氏は、第４４回日伊声楽コンコルソ第１位など、数々の賞に輝くテノール歌手です。また、これまでは１１月中旬に開催してきました社会教育功労者の感謝状贈呈式ですが、千葉市の社会教育の発展に尽力された方々を表彰し、その成果のより一層の周知と社会教育による一層の振興を図るため、今年度はこのまなびフェスタと同じ日に開催するということで、６日（土）にホールで開催することになりました。６０人の個人表彰の方と、３団体を表彰する予定です。

議案第３７号　平成２６年度末及び平成２７年度公立学校職員人事異動方針について

和田委員長　教職員課長、説明をお願いします。

伊藤教職員課長　議案第３７号「平成２６年度末及び平成２７年度公立学校職員人事異動方針について」、説明します。

本件は千葉市教育委員会組織規則第８条第４号の規定により議決を求めるものです。本年度の異動方針については昨年度と大きな変更点はありませんが、一部文言の修正、見直し等を図りま

した。それについては、お手元にある参考資料の新旧対照表、参考資料の１枚めくっていただいてありますが、詳細についてご確認いただきたいと思います。まず、実施要項の２、広域人事についての（２）の表現ですが、「経験年数、担当教科・科目等を考慮しながら」という一文は削除しました。次に３、管理職への登用等についての（１）の表現ですが、「全市的な視野に立って」という一文を追加しました。続いて４、「管理職からの降任について」を「主幹教諭への登用等について」に改め、（１）、（２）の文章を追加しました。最後に６、「再任用制度について」を「再任用職員について」と改め、（１）、（２）ともに「意欲と能力のある人材を再任用する」の一文を追加しました。

人事異動は学校組織の活性化を図るとともに、各学校における教育活動の一層の充実・発展を図る基盤となる条件整備と考えていますので、各学校の状況、職員の実情を十分に把握して適正な配置に努めていきたいと考えています。

なお、今後の予定ですが、１２月１日（月）に全校長を対象とした人事異動方針説明会を開催した後、本格的に異動事務を進めていく予定です。

明 石 委 員　資料についてですが、６番の「再任用職員について」、教えてほしいのですが、現職の場合は、国が３分の１県が３分の２の割合で給与を負担しますよね。再任用の場合は県費負担教職員と市費負担教職員はどのような形で分けるか、もしわかったら教えてほしいのですが。

伊藤教職員課長　市費負担教職員についてですが、例えば９０人の初任者指導教員が必要なときに、国、県からの財源の持ち出しが７２％と限定されてしまっています。したがって、２８％分は市の持ち出しによるという形になりますので、そこは県費で補充できず、市費という形になっています。

また、再任用職員の十分な雇用ができなかったケースについては、市費の非常勤講師という形で紹介もしています。

明 石 委 員　もう一点の質問ですが、先ほど課長からもらった小・中・高校の教員の年齢構成がありましたよね。大ざっぱに千葉市の教員は四千二、三百人と思ったら、それで計算したら３，７００人くらいにしかならなったので、その辺の数字の違いを教えてください。

伊藤教職員課長　講師とあるのは、定数内講師で、本来ならば正規の教員を充

てなければいけないのですが、定数内で正規の教員を充足できずに、講師を充てているものです。非常勤講師は除いてあるのですが、それを合算すると、先ほど明石委員から話のありました４，５００人という数が出てきます。

明 石 委 員　そうすると講師がとても多いのですね。いつか数字を見せてください。それは非常にゆゆしき問題ですよね。

伊藤教職員課長　資料に書いてあるものについてそのような形になっていますが、今年度については、４，５００人の教員のうち定数内講師は小・中学校合わせて１５０人近くがいるような状況です。

明 石 委 員　それについて保護者は知らないのですよね。講師ということは免許は持っているが、採用試験に受かっていない人が千葉市だけで１５０人。県はもっと多いのでしょうね。ちょっとわからないのですが、定数外ならわかるのですけれども、定数内で１５０人の講師がいるということは、もし２年後、県から千葉市へ県費負担教職員の権限が移譲されたときに、そういう講師も採用しなければいけないようになるのでしょうか。

和田委員長　免許を持っていて、千葉市にて採用試験には通っていないという人が講師の場合もあるということですか。

明 石 委 員　要するに千葉県の教員採用試験に受かっていないけれども、教員免許を持っている、だから講師になるということです。

和田委員長　例えば他の自治体で教師をやっていた人が千葉に引っ越してきて、それで千葉県の教員採用試験には受かっていないけれども、勤務しているという場合はありますよね。

明 石 委 員　教育委員会としては、１５０人いる講師が急に増えたのか、ずっとこの先、１０年くらいコンスタントにあるのかによって、なぜ手を打ってこなかったのかということになってきます。

志村教育長　かつてそれが何回かありましたから、そのために採用できないわけです。児童生徒数が年々変わるわけです。定数内講師を解任させなくてはいけなくなるということもあります。そのため、免許を持っている講師の方々をある程度採用するという形が全国的に行われているのだと思います。もしそのままで正規の教員を雇用していけば余ってしまいます。かつてそれで大量に勧奨退職をした時代がありました。それは正式にはそれがよいとは思わないけれども、多分、国なり県なりの考えがあって、採用の数という定数を決められているのだろうと思います。

明 石 委 員　「新規採用職員の配置について」で、やっと意味がわかりま

した。（１）の「児童生徒数の変動等を見通しながら、教職員採用の調整を行う」という文言が今、教育長の説明でわかりました。私はてっきり退職の人の変動を見て新規職員を採用すると思っていたらそうではなくて、児童生徒数の変動等を見通しているのですね。

和田委員長　１点伺いたいのですが、新旧対照表の２の（２）で、「経験年数、担当教科・科目等を考慮しながら」という文言を削除したということだったのですが、削除の理由は何でしょうか。

伊藤教職員課長　この人事異動方針については県の人事異動方針を参考にしています。県立高等学校に関する県の人事異動方針の変更に伴うものがあります。その削除した部分よりも年齢構成の不均衡、同一校勤務の長期化の是正、職員構成の適正化を図るということを重視したということです。

和田委員長　そちらの方が多いのでその文言は加えるのではなく、それも含めて、全てというニュアンスを含めているのですね。

議案第３８号　平成２６年度補正予算について

委　員　長　学校施設課長、説明をお願いします。

学校施設課長　議案第３８号「平成２６年度補正予算について」、説明します。

本議案は平成２６年度補正予算について、市長に意見を申し出るため千葉市教育委員会設置組織規則第８条第６号の規定に基づき、議決を求めるものです。

補正理由ですが、平成２７年度に予定していた老朽化対策事業及び非構造部材等耐震対策事業について、国庫補助金の追加内示を受け、予算措置を前倒しするためのものです。また、非構造部材等耐震対策事業５校及び屋内運動場耐震補強事業１校については、入札不調に伴い年度内の完了が不可能となったため、再度予算化するものです。これら６校は昨年度の補正予算で繰越明許費を設定していましたが、今年度内の工事完了が不可能となり、再度の年度繰越はできないことから、改めて予算計上するものです。

補正予算額は２９億１，２９８万４，０００円で、財源は記載のとおりです。

補正予算の内容ですが、老朽化対策事業については補正額は１３億３，４００万円で、外壁改修の設計を１３校で、工事を１７校で実施するものです。非構造部材等耐震対策事業については補正額は１４億９，８９８万４，０００円で、校舎１４校、屋内運

動場３５校で工事を行うものです。なお、これらの中には避難所対応としての耐震補強工事も一部含まれています。屋内運動場耐震補強事業については補正額は８，０００万円で、稲丘小学校の工事を行うものです。なお、これらの完了が翌年度となりますことから、全額繰越明許費を設定するものです。

なお、参考資料に対象校の一覧を添付しています。

委　員　長　耐震工事に関して、完了予定はいつごろを見越しているのでしょうか。

学校耐震化担当課長　今回の入札不調になりました１件は、やはり最後に１つ残ってしまったものですから、早期に発注を行って、今年度中になるべく契約に持っていきたいと思っています。また、８月、夏休みあたりまでに完成させたいと考えています。

委　員　長　わかりました。それで１００％市内の耐震化が終わるということですね。

学校耐震化担当課長　はい。

議案第３９号　千葉市立小学校設置条例の一部改正について

議案第４０号　千葉市立中学校設置条例の一部改正について

委　員　長　議案第３９号及び議案第４０号については、関連があるため、一括して説明を行い、審議の後、個別に議決を行います。学事課長、説明をお願いします。

学 事 課 長　議案第３９号「千葉市立小学校設置条例の一部改正について」及び議案第４０号「千葉市立中学校設置条例の一部改正について」、一括して説明します。

これは新たに千葉市立幸町小学校と花見川中学校を設置し、それぞれ幸町第一小学校及び幸町第二小学校と、花見川第一中学校と花見川第二中学校を廃止するため、条例の一部を改正するよう市長に求めるため、議決を求めるものです。

改正の概要ですが、まず小学校については、幸町第一小学校及び幸町第二小学校を廃止、統合して、新たに幸町小学校を、市内に１２８番目の小学校として設置するものです。幸町小学校は旧幸町第四小学校を改修し設置します。開校時の規模については、１１月現在における予定で１６学級、児童数３７６人、校長以下教職員３５人を見込んでいます。なお、特別支援学級については現段階で予定児童数を把握できないため、この児童数の中には含めていません。なお、統合前後の学校の位置と学区の範囲については、参考資料に通学区域の図がありますので、ご参照ください。

続いて千葉市立中学校設置条例の一部改正について説明します。花見川第一中学校及び花見川第二中学校を廃止、統合して、新たに花見川中学校として市内６１番目の中学校を設置するものです。花見川中学校は現在の花見川第一中学校を改修し設置します。開校時の学校規模につきましては１１月現在における予定で１６学級、生徒数４８１人、校長以下教職員３６人を見込んでいます。なお、特別支援学級については予定数を把握できないためこの中には含んでいません。なお、学校の位置と学区の範囲については参考資料に通学区域がますのでご参照ください。

最後に、条例の施行期日ですが、両条例とも、平成２７年４月１日としています。

８　その他

(1) 第１２回定例会は、事務局において日程を調整の上、開催日時を決定することとした。

９　閉会

和田委員長より閉会を宣言